魂の指定席 新島襄を語る（六）

本井康博（大学神学部教授）著

思文閣出版
1,900円＋税

本井教授の「新島襄を語る」シリーズは早くもこれで6冊目を迎えた。本書にも新島研究の最新の成果が織り込まれ、楽しく読めて、しかも啓発される。

徳育とは魂を浄化することであると新島は捉え、これをもって人格形成の核心と考えた。その「魂の落ち着く場所」を著者は「魂の指定席」と言い換えて、本書の題名とした。

本書は同志社との関連で、新島の母校たるアーモスト大学はもちろんのこと、ウィリアムズ、ハーヴァード、イェール、プリンストンの諸大学、また慶応義塾や日本女子大学についても論じている。リベラル・アーツとは何かという、古くて新しい問題とも取り組み、アメリカの大学の「カレッジ的性格」に有効な光をあててみせる。

新島がめざした同志社大学のモデルはアーモストだったのか、それともハーヴァードだったのか。その答を知りたい人は、ぜひ本書を読むべきである。

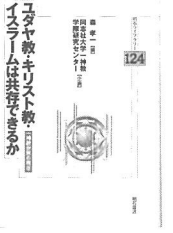
アメリカン・ボードの初期の歴史に関する説明も傾聴に値する。新島が「日本におけるキリスト教大学のためのアピール」を英文で起草したとき、それに推薦の言葉を寄せた3人はウィリアムズ大学のホプキンズ学長、アーモスト大学のシーリー学長、およびアメリカン・ボードのN. G. クラーク主事だった。そしてその背後にはいつも新島の「アメリカの父」たるハーディーがいた。

同志社精神のルーツを探し求める人にとり、これは必読の書である。

北垣宗治（大学名誉教授）

ユダヤ教・キリスト教・イスラームは共存できるか——一神教世界の現在

森　孝一（大学神学部教授）編著



明石書店
4,000円＋税

大学大学院神学研究科が中心となって開設した一神教学際研究センターの研究プロジェクト「一神教の学際的研究——文明の共存と安全保障の視点から」は2003年度から2007年度まで文部科学省によって21世紀COEプログラムに採択された。本書は、このプログラムの主たる二つの研究テーマのうち「一神教の再考と文明の対話」を取り扱う第1部門の研究成果を編集したものである。

本書は3部から構成されている。第1部では7人の著者が世界各地で諸宗教の共存を巡って生じている問題を報告している。そうした問題の多様性と複雑さは、共存への安易な期待を打ち砕くほど錯綜している。例えば、通常「世俗主義」は政教分離や信教の自由を保障したり諸宗教間の紛争を調停したりするための前提条件と見なされているが、第1論文を執筆した澤江史子はトルコにおいては世俗主義派が「上からの西欧化」を推進するために宗教そのものを反近代的と断定し、信仰者の私的領域までをも抑圧や統制の対象としたことを紹介している。

第2部では4人の研究者がユダヤ教・キリスト教・イスラームのそれぞれに内在する「共存を妨げているもの」を分析し、第3部では3人の著者が他宗教との共存に向けた建設的提言を行っている。いずれの研究者も、宗教を外部から眺めるのではなく、いずれかの一神教に深くコミットしながら、同時に厳しい自己吟味と冷徹な現状分析を行っている。

三宅威仁（大学神学部教授）

アメリカのグローバル戦略とイスラーム世界

森　孝一（大学神学部教授）、村田晃嗣（大学法学部教授）編著

明石書店
4,300円＋税

オバマ大統領の外交政策は、今後どのような方向に進むのか。いま世界で最も関心を集めているこのテーマについて、アメリカ当代きっての政治学者F・フクヤマは、それを「非ブッシュ・ドクトリン的なもの」として説明する。

それぐらいのことは誰の目にも明らかだと思われるかもしれない。しかし、ブッシュ・ドクトリンとは如何なるものだったのか。実は、このことは、あまり明らかにされていない。

本書は、2期8年にわたったブッシュ政権の「対イスラーム世界外交」を総括するものである。総括が目指されているだけあって、「保守主義の実像」（第I部）や「テロと核に揺れるアメリカ外交」（第II部）についても分析がなされている。

全部で15編にもなる議論をここですべて紹介することはできないが、本書の目玉となるのは「国際ワークショップ」の記録だろう。

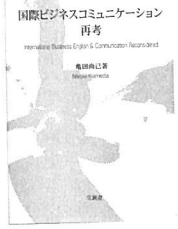
このワークショップで講演をしているのがフクヤマにほかならない。かれは、ブッシュ・ドクトリンを「テロの脅威」「先制攻撃と予防戦争」「国際社会におけるアメリカの役割」「民主主義の戦略的使用」などの観点から検証している。かつてはネオコンの思想的な支柱を担った人物だけに、その批判的考察は示唆に富んでいる。

そのあとのディスカッションでは、多くの討論者が、冷静ながらも鋭く講演内容に切り込んだ。フクヤマも負けじと応答している。この仮借なき応酬の記録は、今後のアメリカのグローバル戦略を考えるうえで、またとない材料となるに違いない。

藤本龍児（大学一神教学際研究センター特別研究員）

国際ビジネスコミュニケーション再考

亀田尚己（大学商学部教授）著



文眞堂
3,000円＋税

本書を精読してえた充実感は「素晴らしい」の一語に尽きる。何故かといえば、本書がこの分野を専攻する研究者にとって貴重な研究書であるばかりでなく、実業界の人々や学生に対する教育的配慮にも留意して著述されていると思うからである。

著者の過去における英語を駆使した豊かな国際ビジネス経験と約40年にわたる本格的研究の成果が現時点で再考され上梓されたのが本書である。そのことは書名からも自明である。

本書の序章を読むと著者の意図が明確に理解される。そこでは「国際ビジネスコミュニケーション」の定義を試み、それについての展開が第1章から第7章まで続く。先行研究を十分に渉猟し考察しながら読みやすい文章表現で説得力ある研究成果が提示されている。特に、言語力（例えば英語力）に加えて対象国・地域の文化を理解した国際ビジネスコミュニケーション能力の必要性が数多くの具体例や実態調査の結果を交えて例証されていることには感動と共感を覚えた。そして、2002年に国際ビジネスコミュニケーション学会と改名された学会の研究対象や方向性が、本書により一層明確化され〝心の曇り〟が払拭された思いがする。

現在、著者は右記学会の要職にあるばかりでなく、米国の同分野の学会の次期理事に選出されている。国際的レベルでの一層精緻な研究とその蓄積された成果の発表を期待したい。

中村那詮（明治大学名誉教授）

現代図書
6,667円＋税

地域福祉の国際比較
―日韓・東アジアモデルの探索と西欧モデルの比較―

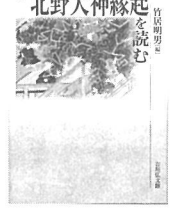
井岡　勉（大学名誉教授）、
埋橋孝文（大学社会学部教授）編著

１９８０年代以降、多くの先進資本主義国家では地方分権化と社会サービスの民間委託が推進された。その結果、１９９０年代後半から地域における公的機関と民間組織の協働実践が社会福祉における主要なテーマとなった。よって、今日の文脈で地域福祉を語ることは、単なる民間によるボランタリーな活動の紹介や社会サービスの供給現場におけるルポルタージュにとどまらないのである。

そのような背景を踏まえ、欧州の福祉国家と日本を含む東アジアの国家における地域福祉実践の比較を通し、地域福祉の東アジアモデルを探求することを目的に実施された研究プロジェクトの成果が本書である。福祉国家の国際比較枠組を素地に、地域におけるガバナンスや地方分権、公民パートナーシップ、社会的孤立の問題とそれに対するソーシャルワークの実践などの切り口から各国の地域福祉を分析している。

編者らも認めるように、本書は地域福祉における国際比較枠組の検討および比較のための試論の域を脱していないかもしれない。また、今後は国際的に通用する地域福祉概念を操作化することも必要であろう。しかし、地域福祉が今日の社会福祉において重要なコンセプトであることは疑いのない事実であり、その実践は国民の生活にダイレクトに反映される。だからこそやや大胆であっても国際比較の観点から日本の実践を省みる作業は必要であろうし、また、本書はその第一歩として大変意義深い成果といえよう。

室田信一（大学社会学研究科博士後期課程）



吉川弘文館
2,800円＋税

北野天神縁起を読む

竹居明男（大学文学部教授）編

竹居教授編『北野天神縁起を読む』が好評を博している。

ふだん神話と無縁の学生でも、受験の前に菅原道真を祀る天満宮＝天神さんへ詣り「お守り」を受けた人々は少なくないであろう。その実在した道真（８４５～９０３）の伝記と、没後に怨霊として恐れられ北野に祀られた経緯と、天満天神としての様々な霊験とを、リアルに描いた絵巻が伝存する。

この『北野天神縁起（絵巻）』を、『古事記』や『源氏物語』などに並べて「歴史と古典」シリーズ（全10冊）に採りあげ、その編著者に「天神信仰」研究の第一人者竹居昭男教授を選び一任したのは、企画委員たちの炯眼（けいがん）・英断といえよう。

その期待に応えて竹居教授は、まず天神信仰と縁起絵巻の成立と変容過程を明快に概観した上で、最古の『北野天神縁起』（国宝）の内容（詞書と画面）に即して「史実と伝承」を詳細に解説する。共に大変分かりやすく、しかも随所に最新の研究成果が盛り込まれている。

それに続く各論では、竹居教授より若い６人の専門家（吉原浩人・三橋進・菅村亨・須賀みほ・鈴木幸人・渡辺麻里子の各氏）が、この縁起（絵巻）を思想史・美術史・説話学などの立場から縦横に論じ尽くし、その多様な展開ぶりを見事に浮かび上がらせている。

なお、数個のコラム、特に末尾「天神さんの細道」が面白い。あの童唄（わらべうた）「通りゃんせ」で「帰りは恐い」というのは何故か。そのナゾ解きにも、竹居教授の新説がさりげなく示されている。むしろ、ここから読み始めるとよいかもしれない。

所　功（京都産業大学法学部教授、大学文学研究科兼任講師）

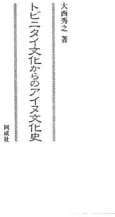
晃洋書房
2,400円＋税

ポトナムの歌人

安森敏隆（女子大学学会学部特任教授）、
上田　博　編

数多ある短歌誌の中で本年８月に千号記念号が出る「ポトナム」はすぐれて長い命脈を保っていることでも知られる。小泉苳三の提唱する「現実的新抒情主義」の理念のもと、多くの歌人が集い支持され今日に至っているのである。本書は、その創始者および阿部静枝・君島夜詩・頴田島一二郎に始まり金子元英・白川静に至る「ポトナム」に深く関わった10人の、歌人としての閲歴と代表的歌集から抄出した歌の鑑賞とを記している。執筆者もまた「ポトナム」選者・同人であって、人を得た簡潔な解説文と鑑賞批評とは同じ志をもつ歌人としての目と心から紡ぎ出されているものの如くである。歌学びの道にある者がつねに携行でき、ときに本書を繙き豊かな思いに遊べるような工夫も凝らされていて、編者の眼力も自ずから反映されているものである。日本の正統な文芸史を形成する和歌（短歌）の、今日から明日に繋がる麗しいうねりの近代における具体相を「ポトナム」歌人群像を通して見ることは正しい。ものに心を奪われ震えた漣を歌という定型に収めて磨き上げようとするとき、優れた先達の歌と生き方が何よりのよりどころとなる。人はそのようにしながら自身の心境を照射してきた体験をどこかに持っている。本書はその原点を示す好著と言えよう。瀟洒な装丁でありながら、歌人必須の要諦を要領よく我々の前に衝き出してくれているように思える。我々は安んじてこの宝石箱を手にしつつ贅沢な時を過ごしたいものだ。

中西健治（立命館大学文学部教授）



同成社
5,000円＋税

トビニタイ文化からのアイヌ文化史

大西秀之
（女子大学現代社会学部准教授）著

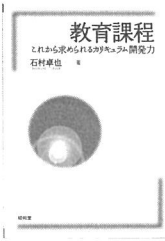
アイヌ文化やオホーツク文化という言葉を耳にしたことはある人でも、「トビニタイ文化」なる言葉は初耳であろう。それは９～13世紀頃（本土では平安時代～鎌倉時代）の北海道に存在した文化であり、アイヌ文化の成立以前に存在した人々の文化である。本書はその謎に満ちたトビニタイ文化について初めて扱った研究書である。

近年、「アイヌ新法」や「アイヌ先住民族決議」の成立を受けて、現代社会における北海道の先住民への問題意識は高まっている。しかし日本史の教科書を見ても北海道に関する記述はわずかであり、その歴史を知るのは容易ではない。その理由は、北海道の文化が永らく「無文字社会」であったからである。

文字のない社会の歴史を解明する唯一の手段こそ考古学である。本書は最新の発掘成果を駆使して、歴史に書き記されることのなかったトビニタイ文化を明らかにしていく。特に注目すべきは、彼らが決して本土から孤立して存在したのではなく、本州からもたらされる鉄器の入手を通じ、交易などに積極的に従事していたという事実である。

つまり北海道の過去は間違いなく日本史の一部であり、アイヌ問題などを理解するにも、その過去を含めた歴史的視野が求められるのだ。そのためにも本書は必携の書となるだろう。

石村　智（奈良文化財研究所）



昭和堂
2,200円＋税

教育課程　これから求められるカリキュラム開発力

石村卓也（女子大学教職課程センター特任教授）著

校長にとって、年度末から年度初めは大変忙しい時期である。それは教育課程の編成をしなければならないからである。一年間の成果と課題を見つつ、次年度以降を展望して編成するわけである。人事異動もあり、そのあわただしい中での編成は、つい経験主義に基づいたものになったり、前年度踏襲になったりと安易なものになりやすい傾向がある。

この石村氏の「教育課程　これから求められるカリキュラム開発力」は、教育課程を編成するにあたって、経営戦略や編成手順について具体的に書かれており、教育課程を編成するときに非常に参考になる本である。管理職に一読を勧めたい本である。

この書は、法をもとに公教育の持つ意味や自校の教育課程編成、さらに、戦後の教育課程改革についても詳しく述べている。２００８年の教育課程改革については現行指導要領の「生きる力」を育むという基本的な考え方を社会の情勢を踏まえてわかりやすく解説している。

後半には、法を根拠に教科書の採択から使用について、また、補助教材についても、その使用上の留意点まで言及している。私たち教育現場にいる教員にとって、法は苦手なものである。この書を活用することによって、法を根拠にマネージメントすることができる。また、各章に研究課題が掲載されており、学生の資質向上にも役立つ。是非とも読んでもらいたい一冊である。

藤村　徹（京都市立養正小学校長）

晃洋書房
4,900円＋税

デューイ自然主義の生成と構造

加賀裕郎（女子大学現代社会学部教授）著

本書『デューイ自然主義の生成と構造』のねらいは、19世紀末から20世紀中葉にかけて活躍したアメリカの哲学者ジョン・デューイの思想について、その中心点を「自然主義」に求め、それがデューイのなかでどのように発展的に成立し、その構造的基底がどこにあるのかを解き明かすところにある。

著者が「あとがき」で述べているように、本書は、２００６年に同志社大学に提出された学位請求論文に基づいているが、デューイ研究史の画期に位置づけられる論考である。従前の研究は、とくに日本では、教育哲学者としてのデューイを強調しており、多様に展開するデューイの考え方を包括するのには不十分である。これに対して、本書の論究は、これまで光が当てられてこなかった、１９０５年以降の、プラグマティストとしてのデューイの道具主義的、実験主義的な自然主義的視座に照準を定め、デューイの立場が民主主義の哲学として確立されていく道程を明らかにして、著者がデューイの「冒険」とみなす「民主主義の形而上学」に対して、新たな解釈を示し、デューイ思想の射程を究明している。

著者は、本書のなかで、デューイの言説を丹念に追いながら、ほかの研究者のデューイ理解も幅広く取り上げ、それらが孕む問題点をあぶり出している。著者の明晰な考察と透徹した論理は、随所で看取でき、それゆえに、読者は、その論述に引き込まれていくはずである。本書は、デューイ研究のみならず、プラグマティズム研究に必携の書である。

新　茂之（大学文学部准教授）